

ヒマラヤ

No.374



2003 JANUARY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2003年H A J サマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2003年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しない。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャバンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2003年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切り：定員になり次第
6. その他：H A Jの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

2001年10月、ガネッシュ・ヒマールの主峰であるヤンラ・カンリ(7,429m)を中国側の北面から攻めた。上部に行くにしたがって、その雄姿を現わし始めた。やがて西からの季節風が吹きはじめて我々の登山は主稜線に出たところで幕を閉じたのであった。写真はマナスル東面。

(文：山森欣一、写真：萬徳清孝)

ヒマラヤ No.374

- | | |
|--------------------------------|------|
| 1. 2003年(癸未)の初夢 | 山森欣一 |
| 2. 念青唐古拉山脈東部の最深部に行く(1) | 中村 保 |
| 14. ヒマラヤ・デジタル通信は凄い!! | 中川 裕 |
| 16. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・Books〉 | |
| 18. ロー・マンタンの空、遥かなり(7) | 高橋 照 |
| 22. 日本ヒマラヤ協会創立35周年記念 講演会&祝賀会報告 | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

2003年(癸未)の初夢

H A J 理事長 山森欣一

I) 海外登山情報センターの開設

2000年夏、「山岳4団体(日山協、労山、J A C、H A J)」が、共同してヒマラヤ登山者千人を対象にアンケート調査を行い、その結果を報道各社にも発表した。その時、ある新聞社の記者が取材にきた。登山経験はない、とのことであった。そこでアンケート内容について様々な角度からの質問があった。「海外登山情報センター」の項目で、私がまとめた「ヒマラヤ登山目標高度別遭難」の表を説明。八千メートル峰の死亡率が1970年代4.2%、80年代3.1%と高率であるのに対して、90年代1.5%と大幅に死亡率が下がっているのをみて、「これだけ改善されているのなら今さらにも海外登山情報センターは必要ないのではないか」と言う。私が90年代の数値が低い理由として、八千メートル峰を舞台に行われている「登山」と「高所遠足」の実態を説明し、「登山を実践しつつ死亡率を下げるのが登山界共通の悲願であり、その役割の大きな部分を担うものとして登山界が総力をあげて『海外登山情報センター』を開設することが望まれていると話した。記者は納得いかなかったようだ。山は既に登山者だけのものではない。あらゆる行動が山を舞台に繰り広げられているが、私たちは、登山者として「山」を舞台に素晴らしい行為を行ってきた歴史を持っている。その立場からも「登山」を後世に伝えていく。そのためにも、一刻も早い『海外登山情報センター』の立上げが待たれているのである。

II) 登山共済機構の開設

海の遭難と山の遭難の経費負担の不平等が指摘されて久しい。高齢化社会もやがて終焉を迎える。その時であっても、登山がいまのように盛況であることを望みたい。登山はもとより個人の自由な発想のもとに実行されるべきである。しかし、登山が自然を相手に行われるものであるから、遭難という悲劇を避けて通れないのも、現実である。

自由な登山の結果として起きる遭難を登山者全体で受け止めるシステムを管理するものとしての、

『登山共済機構』の開設が望まれる。

山深く立ち入り記録を残し、環境を汚染した現代の登山者が、後世の登山者に残して最も感謝されるものがこの「機構」である、と信じたい。

機構の骨子については、日本勤労者山岳連盟発行の「登山時報No260、1996/10」に述べたので繰り返さないが、「登山する誰もが分け隔て無く入れて」、「一回の掛金が低額(百円程度)」というのを原則としたいものである。

III) 外国に日本語の山の書籍を贈ろう

吉沢一郎さんが亡くなられてもう4年になる。吉沢さんの蔵書の中の「和書」を、アメリカのニコラス・クリンチさんがアメリカに引き取って、「アメリカで日本語で日本の山の本を読めるようにしたい」という希望を持っていると、中村保さんから聞いた時、私もふと自分のことを考えた。

必要に応じて「山の本」を買い求めたが、結局それは全ての面で中途半端なものとして残ってしまった。妻は同じ登山愛好者であるから山の本に関しては多少の愛着はある。それにしても私と同世代な訳だから終焉の時期はそうそう違わないだろう。しかし、息子や娘は登山には興味を抱いていないらしい。(チビの時にあれほど山に連れて行ったのに!) そうなると、この中途半端な山の本の行き先は知れたものだ。それならいっそう外国で役立たせたいものだ、と思う。私はさしずめ交流のある中国が相手か。山書の会の月報に元H A J会員の豊島正さんも蔵書の始末の方法について書かれていたが、豊島さんの蔵書は2万6千冊というから私とは桁が違う。折しも来年3月を目途に「山岳文化学会」が設立される。そんな活動と合わせて、『外国で日本語の山の本を読める』運動を勧めたいものである。どうですか好きな山の本を中途半端に集めてしまって、子孫に引き継がれそうもない環境の貴方! そろそろ相手国の目星をつけてみては。

念青唐古拉山脈東部の最深部に行く(1)

2002年4 - 5月

中村 保

■計画立案の難しさ

「次回は何処に入るか」ひとつの旅が終わると、次の計画に想いは馳せる。長大な山域のヴェールを剥いでゆくには数年かかるであろう。が、私には残された時間と体力に限りがある。急がねばならない。ヤルン・ツェンポーと怒江（サルウィン川）の分水嶺を形成する念青唐古拉山東部の核心部、易貢蔵布・易貢措の北側の氷雪が最も発達した山群を探查すること、および旧街道と現在の交易路の状況を把握することをターゲットとして設定する。メンバーにはいつもの永井（69歳）・中村（67歳）コンビに日本山岳会理事で「高尾の森」の植林に取り組んでいる河西氏（60歳）が加わる。いずれにしても老年探検隊である。

概説で「多くの氷河は、あたかも無数の巨大な白龍が……」と表現したが、これは上空からの眺めである。日本で発表されている記録は1975年の中国蘭州氷河凍土研究所による若果氷河の調査（『岩と雪』80号、1982年4月）と1989年の日中合同隊の則普氷河調査（『地理』1995年9月増刊号）だけである。しかし、山のプロフィールは紹介されていない。ラサからのアクセスは容易だが、山群の南面は谷が深くゴルジュ帯の通過が困難だろう。展望の開けたところまで行けるかどうか、大いに懸念はあるが、とにかく計画概要を提出して入域許可をとる。しかし、机上の計画はラサに到着した日に早くも変わることになる。旅の途中でも次々と変更を余儀なくされる。が、「ヴェールに包まれている未踏の山の写真を撮る」という命題のための軸足だけは頑なに動かさなかったお陰で一応の成果を挙げることができた。中国辺境では、「いつ何が起こるか分からない」「不可能なことではない、必ずなんとかなる」と心に刻み込んでハプニングに落着いて対応するのが旅の要諦である。したがって、予期せぬ事態には柔軟に、且つ

速やかに対処しなければならない。そのためには、ルートやコースについて出来るだけ多くの選択肢を持っていたほうがよい。今回の旅の計画と結果を対比してみよう。一は車、…は徒歩・馬を示す。

計画：ラサー（川蔵南路）－通麦^{トンマイ}－易貢措^{イゴンツォ}－南面氷河偵察…（易貢蔵布^{イゴンツェンポー}逡巡）…^ニ屋^ウ…（夏曲逡巡）…^ア蘭^{ラン}多^ダ…（旧街道・霞曲逡巡）…シャルガン・ラ…^{ベンバ}辺^{ベン}坝^バ／…北面の谷偵察^{バラリン}－巴里郎^{バリラン}…
トゥン・ラ…^{ボミ}波密^{ボミ}－（川蔵南路）－ラサ

結果：ラサー（川蔵南路）－通麦－易貢措－通麦^{ベンバ}（川蔵南路）－邦達^{バンダ}－加玉橋^{カユキョウ}－洛隆^{ロロン}－普玉^{プユ}の谷・北面偵察BC1－^{ベンバ}辺^{ベン}坝^バ－陳木錯^{チンモツォ}の谷・北面偵察BC2－洛隆－昌都^{チンム}－（川蔵北路）－^{チンム}那曲^{ナツク}－（青藏公路）－ラサ

計画を変更しなければならなかった理由は、(1)易貢蔵布のゴルジュ帯の通過ができるかどうか確かな情報を得られなかったこと、(2)ツェンポー・怒江（サルウィン）分水嶺を越える交易路の5,000mの峠がまだ雪で閉ざされていたためである。

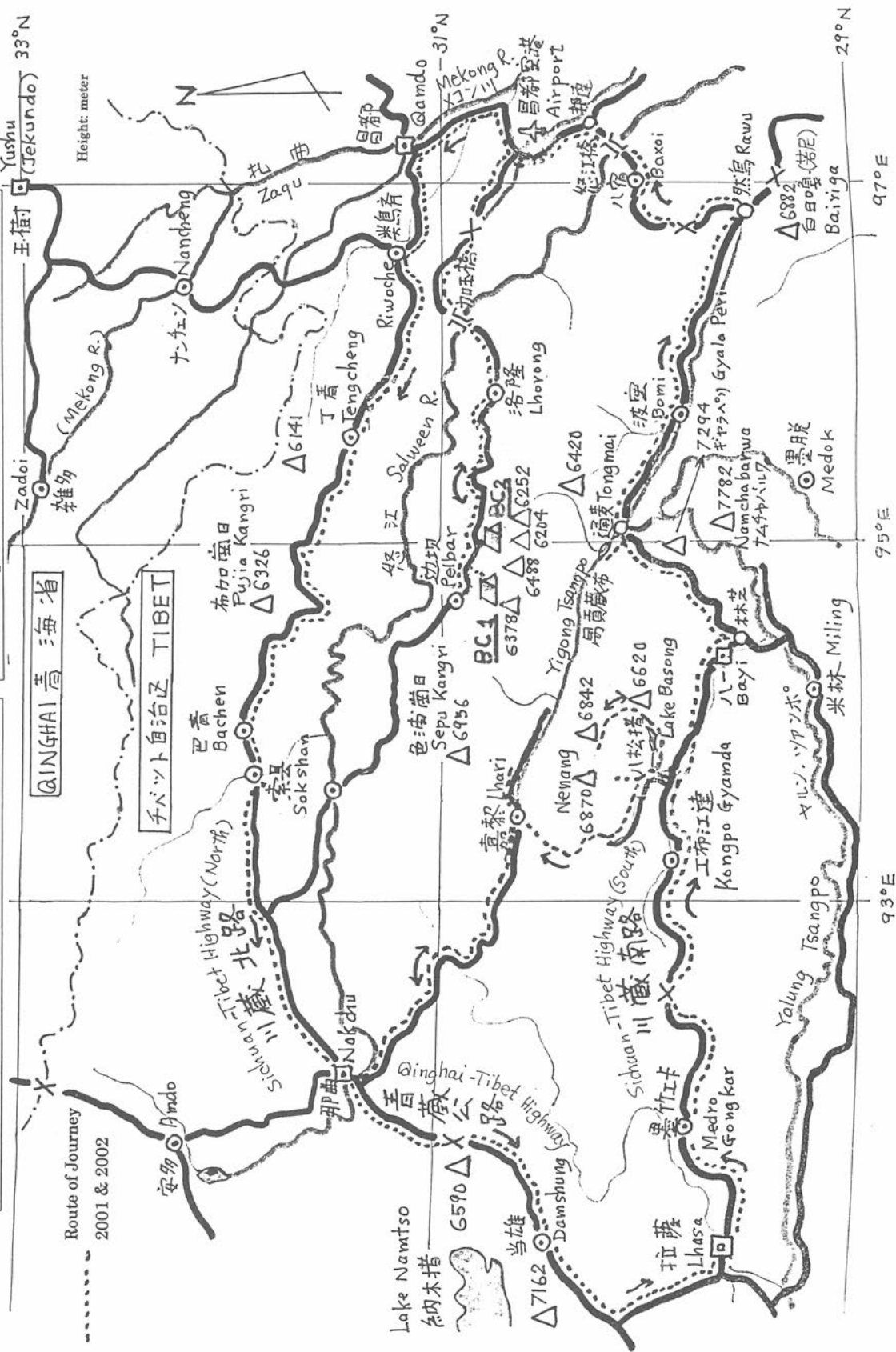
■変貌するチベット

4月21日、上海経由成都入りする。張兄弟の四川探検旅遊会社の順調に発展しているのは嬉しい。兄、張繼羅の経営手腕と弟、張少宏の人柄の組合せがうまく機能して会社を支えている。最近“Sichuan Earth Expedition Club Inc.”という別会社を設立し、中国体育局より登山とラフティングの営業ライセンスを取得し、旅遊局に関係なくビジネスができるようになった。

4月22日、朝の便でラサに飛ぶ。高曇りだが、ツェンポー大屈曲部を圍繞するナムチャバルワ、サンルン、ギャラベリ、テイパカンリの大パノラマを写真に収める。念青唐古拉東部の無数の雪峰と氷河が次々に眼下に展開する。山がたくさんありすぎて、固定できないのがもどかしい。夜は中国西藏登山協会のドウ氏と計画についての調整を

チベットのアルプスへー東チベット・4,000 キロ

To The Alps of Tibet - 4,000km in East Tibet



し、その場で、南側から易貢蔵布を辿り、北へ分水嶺のシャルグン・ラを越えるのを止めて、反対に北側から入る計画に変える。ドウ氏との四方山話しのなかで、ボニントンとクラークの英国隊は色浦崗日の登山料（2回分）としてUS \$ 150,000支払ったことを知る。

4月23日、ラサ市副市長の趙建安氏、中国西藏登山協会の前秘書長の高謀興氏、および日本通の張江援氏と夕食をとともにし、我々の計画の概要を説明する。高氏は登山隊が入っていない地域で情報がないところなのでくれぐれも慎重に行動するようにとアドバイスしてくれる。副市長の趙氏は中国科学院の経済学の教授で、青蔵鉄道の建設を朱鎔基首相に企画・具申した中央のエリート官僚である。3年前に北京から派遣された。ラサ市の経済・文化・スポーツを担当している。中国西藏登山協会は彼の管轄下にある。2001年の秋には松本で開かれた世界山岳都市会議に出席のため来日している。ドウ氏も含めみな漢族である。あらゆる分野で漢族の支配が浸透しつつある。

半年見ないと開発による新たな変化に驚く、道路の整備が進み、新中国的なコンクリートの画一的な箱物が増え、チベットの風情は消えつつある。登山協会や旅行社の幹部との会食はいつもながら贅沢な中華料理である。きらびやかな「香港海鮮酒楼」で美味な広東料理のフルコースのご馳走である。ノルウェー産サーモンの刺身まででる。ラサもそうだが、幹線道路沿いの町は言うにおよばず、僻地の郷政府のある村まで漢族のレストランが進出している。ラサでは中華料理の種類も多様で、東北出身者の餃子店も多い。また、街で働くチベット族の若者のあいだでは食生活の嗜好に変化の兆しがあり、ハンバーガーなど欧米式のファースト・フード店を含む25の洋食レストランがラサ市にできている。カラオケバーやマッサージ・パーラーが深夜まで賑わっている。地方の奥地でも食べ物屋の殆どを四川省からきた出稼ぎが経営しており、自ずと四川料理がだされる。そのため、旅行中チベット族の食べ物を口にする機会が殆どない。

青海省のゴルムドとラサを結ぶ青蔵鉄道の建設が本格的に始動している。「世界一高所の鉄道」

と垂れ幕が張られた現場は活気に満ちている。工事は難しい時間のかかる区間から始まっている。ラサ北西の洋八井からラサ寄り溪谷部分のトンネル工事に着手している。チベット族にたいする懐柔策として、共産主義のイデオロギーを押しつけるより生活の便利さ快適さを提供するほうが効果的である。携帯電話の普及は当然とて、通信網の整備も目を見はる。東チベットの最深部の町、ペンバや洛隆から国際電話が直接ダイヤル方式で簡単にかかる。太陽光発電（ソーラー・バッテリー）の小型ユニットが街中で売られ、僻地のチベット族の家で使われているのには驚かされる。バイクが急速に増え、馬に取って代わりつつある。

広東、福建、浙江省などの沿海の発見した都市からの援助によるインフラ整備のプロジェクトがたくさん目にとまる。なかでも広東省の支援は川蔵南路沿線の林芝県の町々に集中している。小学校、病院、住宅、発電所など多岐にわたる社会基盤が対象となっている。沿海の各省は競って援助をしている。中央政府の行政指導による対チベット政策の現われであろう。

■川蔵南路—易貢措へ

4月24日、曇。7:30、8℃。二台のランド・クルーザーに分乗して午前9時まにラサを出発する。川蔵南路を東へ、勝手知った道である。舗装道路を快適に飛ばす。昼前に米拉山（5,020m）を越える時は雪になる。5月半ばに雨期のような天気が始まった去年と同じように、今年も異常気象だとドウ氏は言う。4月に4日間もラサで雪が降ったのは初めてらしい。先が心配だが、「晴れ男」の私には天が味方してくれるだろう。この日は八一鎮（3,040m）の林芝貧館泊まりである。河西さんが軽い高山病のため体調よくない。

ラサからの同行者は英語のガイドのタシ（28歳）とコックのツェリン・ザシ（20歳）、両名ともチベット族で漢字表記は扎西である。ガイドのタシはタンカの絵師であったが英語を勉強し5年前からトレッキングのガイドをしている。チョモランマBCなどポピュラーなツアーに同行しているが、東チベットの山には入った経験はない。コックのザシも同じである。タシは2001年にはオランダ隊についてクーラ・カンリの山塊に入っている。運

転手は二人とも漢族である。車の修理もできる魏（46歳）さんは1971年に15歳のときに河南省からチベットにきた。もう一人の陳（42歳）さんは成都から出稼ぎにきている。27日間、4,000kmのドライブをしてくれたタフな連中である。

4月25日、8時半に出発、小雪のなか4,540mの峠をこえてヤルン・ツェンポーの北側を下る。標高は2,000mまで下る。植生は石楠花、針葉樹、くぬぎの類から湿潤な亜熱帯雨林的な樹林帯になる。東久（2,600m）、少数民族門巴族の排龍（2,100m）を過ぎて通麦の手前の易貢蔵市と帕隆蔵布のヤルン・ツェンポー 2大支流の合流点に昼頃着く。溪谷沿いの難所は突貫工事で道路の補修が行われている。二つの支流はポ・ツェンポーの名と変えたヤルン・ツェンポーの大屈曲部に注ぐ。

私と永井さんが合流点から北西に向かう易貢蔵布に入り、上流部ゴルジュ帯の馬による通過が可能かどうか調べるために、谷間の広い河原の右岸を易貢措の村まで車で往復する。2000年の大洪水が河原に荒々しい爪痕を残している。20km先の柏村(2350m)という村落で情報を集める。秋には全通しているが、その他の季節は普通になることがある、橋が通れないこともある、八蓋から先は現在通れるかどうか分からないし、それを確かめるには2日ほど歩いて八蓋まで行く以外にないと言う。それを聞いて暗澹たる気持ちになる。北側から分水嶺越えて下ってきて、易貢蔵布が通行不能だったらエスケープ・ルートはない。来たルートに戻るか途中から嘉黎に抜けるしかないが、どちらも大変だろう。リスクが大きい。この時点で易貢蔵布の遡行・下降は断念せざるを得なくなった。計画変更の二つ目である。なお車道は柏村の約20km先で対岸に通じる橋のところまで続いている。

易貢蔵布の北側の氷河帯に入るのも当初の目的の一つであったが、これは帰路時間を割くことにして波密に向かう。途中、通麦・波密間の川蔵南路の最も危険な崩落地帯を懸念したが、大掛かりな補強工事が行われている合間を通過する。後で運転手の報告で知ったことだが、この工事区間は5月2日以降しばらくの間は5月11日、21日の両日以外の日には交通止めになった。このことがまたしても我々の計画に影響し、帰路は川蔵北路を

辿ることになり、上記の氷河帯偵察は実現せず宿題として残った。

午後7時半、北の谷への分岐点の橋を通過する。この谷の奥、傾多の先の玉仁北西に、1989年に日中合同隊が調査した則普氷河があり、多くの6,000m峰が存在する。1935年に英国のR. コールバックとB. トレイシーが玉仁から北へ交易路を辿りツェンポー・怒江（サルウィン）分水嶺のトゥン・ラ（5,267m）を越えて旧街道へ抜け、サルウィン川上流部の探査を行った。

4月26日、曇。8:00、10℃。午前9時に波密（2,775m）を出発。一時間ほど快適な舗装道路を走る。崖崩れの危険のある難所があり上り下りも多いが、川蔵公路は南路がメインである。そのため、整備、舗装が重点的に行われている。公路は帕隆蔵布の右岸沿いの林間を進む。晴れていれば青い溪流と崗日嘎布山群の6,000m峰が美しい。10時に松宗（3,100m）通過、11時過ぎに崗日嘎の谷に入っている山口大学名誉教授、松本健夫氏のグループのBCにメッセージを残す。然烏湖は風光明媚、アルプス的な景観は将来の優れた観光資源である。然烏（3,930m）にて昼食、午後1時半にツェンポー・怒江分水嶺の峠（4,450m）を越えて3時に八宿（3,360m）に着く。6年前に初めて雲南からきたときと比べると道路は格段に良くなった。かつての苦労が嘘のようである。ゴルジュ沿いに下り、午後4時に怒江橋（2,900m）を渡る。荒涼たる無機質な怒江大溪谷はいつ見ても圧倒される。自然の驚異を感じさせる。公路は、業拉山（4,618m）まで高差1,700mを一気に登り、東チベット高原に至る。6時半、邦達（4,100m）着。邦達は川蔵南路から北路への分岐点でもあり、昌都空港に近いので交通の要ではあるが殺風景で埃が舞い汚い。レストランの二階の招待所に泊まる。ここから先は当分宿泊所にはトイレがないことを覚悟せねばならない。ちなみに邦達では、大きいほうの用はかなり離れた解放軍の兵舎のトイレまで行かねばならない。小さいほうは何処で用を足してもお構いなし。

夜は成都からきた姉妹の長女がオーナーの一階のレストランで四川料理、チベット辺境まで商売のために進出している彼女たちの逞しさに驚嘆す

る。飽食時代の日本のギャルと比べると、中国人のバイタリティーはすごい。姉は23歳、妹は20歳。姉のほうが19歳のとき親戚から18,000元（30,000円弱）を借金して邦達でレストランを開業した。「経営は好調で、現在1月に7-8,000元の利益をあげています。当分ここでおかね溜めて資本を増やすことに専念します。そして、邦達でのビジネスに陰りができたら、溜めた資本をもって北京へ行き四川料理店を開きます。そこで成功したら日本に進出したいですね」と、北京に行ったことがあるという若き女性オーナーは屈託ない笑顔で夢を語る。微笑ましい。活力に拍手し脱帽する。

■東チベットの最深部―「天葬」の土地へ

4月27日、晴。7:30、6℃。8時半邦達を出発する。怒江^{メジアン}の支流、玉曲源流部^{ウイチュウ}の開けた谷、典型的な東チベット高原である。ヤクが多い。邦達と昌都を結ぶ幹線道路を北上する。途中随所で道路工事が行われている。2時間ほどで、邦達から60km北にある昌都空港に着く。海拔4,350m、世界で標高が一番高い商業空港だろう。何もない寒い吹きさらしの空港である。滑走路は長くジェット機の離発着には十分な距離である。成都とラサの間を週4便運行されていたが、天候しだいでよく欠航する。空港から昌都（3,200m）まで125km、舗装道路が怒江・滄瀾江（メコン川）分水嶺の浪拉山（4,572m）を越えて通じている。今日の行程は長い。空港から15分ほどで洛隆への分岐点（4,375m）に着く。ここから洛隆まで四つの峠を越える187kmの道のりである。

分岐点から左への道に入る。玉曲源頭の広大な高原を緩やかに北西に上り、正午に怒江・玉曲分水嶺の峠（4,780m）に立つ。天気は長続きせず小雪がちらつくが、いよいよ未知の世界に足を踏み入れると思うと気持ちが高揚する。「オイラソー！」山の神様に感謝を捧げる。ヤクの牧草地から針葉樹林帯へ、峠を境に景観は一変する。西側の怒江流域へ下る道は溪谷を辿る。針葉樹の巨木に囲まれた二つ目の峠（4,350m）の北側には5,500mクラスの他念他翁山系の顕著な岩峰群が連なる。赤茶けた土質が剥きだしの谷にある馬利の村落を通過する。さらに三つ目の峠（4,350m）を越えると、道は急な山腹を一気に怒江のほとりに下り、

加玉橋（3,295m）を渡る。河岸段丘に耕作地と村落が点在するが、荒々しい溪谷である。河床に近いところは乾燥し樹木がない。

中華民国時代の西康省の地図には嘉玉橋と書かれている。北京―ラサ旧街道の要衝であった。インド測量局の密偵、パンディットA-Kは1892年9月2日に嘉玉橋に到着し旧街道を辿ってラサに向かった。「この橋の近くおよび流れの両側に幾つかの村がある。我々はその一つ村に二晩泊まった。草と薪は調達できた。付近は耕作されており、桃や杏がたくさんある。沸点から計算した標高は11,040フィート（3,365m）であった。橋を渡るのに一人4アンナの通行料をとられた」A-Kはインド測量局の記録（Explorations in Great Tibet and Mongolia, by A-K, 1879-1892 made in connection with Trigonometrical Branch, Surver of India）にこう書き残されている。このA-Kの記録からみると、昔の橋は現在の橋の下流にあったようだ。

1922年に白人として初めて東からラサに到着したペレイラ將軍も北京―ラサ旧街道を辿ったが、なぜか嘉玉橋は渡らずに西へ迂回し、丁青から南下して加玉橋の少し上流で怒江で渡り洛隆に至るルートを選んでいる。ペレイラにとっては白人による東からのラサ到達は「英国人が最初でなければならなかった。彼はその悲願を実現した。1923年には雲南、東チベットから北へ初の縦断旅行に挑戦したが、現在の四川省甘孜で病に倒れ志半ばで客死する。偉大な探検家、悲劇の將軍ペレイラについては拙書『深い浸食の国』に書いた。

現在の公路は橋の直ぐ上流で怒江に流れ込む支流のゴルジュを通過し高原に上る。文革時に紅衛兵によって破壊された大きな僧院の廃墟が見下ろす旧洛隆、康沙村（4,100m）で少し車を止めた後、四つ目の峠（4,500m）を越え西側に谷を下れば洛隆県の県庁所在地である。午後6時洛隆着（3,680m）。農行招待所に泊まる。

4月28日、晴後曇。9:00、5℃。休養する。心配した河西さんの体調はよくなってきた。洛隆から辺境にかけては東チベットの最深部であるが、旧街道沿いは耕作地が多く、したがって比較的人工稠密な地方である。ただ水の少ないところで、

洛隆で見た「天葬」風景（下の2枚も）



招待所には水道がない。水は節約して使われている。洛隆は落ち着いた町である。物資は揃っており、ソーラー・バッテリーも売っている。

午前中にラマ僧院、黄帽派の孜扎寺を訪れる。親切な若いラマの四郎次平さんが寺の中を案内してくれる。寺の規模は大きく感じられないが、125人の僧侶がおり、昌都の本山の出先として影響力が大きいと言う。寺の近くの山裾に天葬（鳥葬）場が見える。外国人には見せないと聞いていたが、

千載一隅のチャンスである。ラマに頼んだところ、いとも簡単に連れてってくれると言う。何度も東チベットに足を運んでいるが、私には初めての経験である。畑を横切り10分ほど歩いてお恐るおそるラマの後について行く。石積みの塀に囲まれた斎場の入口に近付くと中が見えてくる。一瞬たじろぐ。数十羽、いや百羽を超えるだろう秃わしが群がっている。啄ばんでいるものは見えないが、三人の男が何かを鳥に与えている。後で分かった



が、鳥が食べやすいように骨を砕いてツェンパと混ぜて団子にして与えている。柔らかい内蔵や肉は先に食べさせた後だった。葬儀は朝始まるので早く来ればもっと生々しいシーンを見ることができたかもしれない。空にもたくさんの禿わしが舞っている。異様な光景であるが、処理は淡々と行われ、外国人が興味本位で覗いても、さして拒絶反応を示さないところを見ると、この地方では日常的な行事として執り行われているのだろう。

旧辺坝でも天葬を見た。斎場は村の外れの山裾にある。タイミングが遅れたため禿わしの数は減っていたが、骨を砕いてツェンパを混ぜて与えていた。鳥と人間の共生を示唆するような雰囲気であった。帰路、洛隆でもう一度現場に立ち寄ったが、葬儀は行われていなかった。塬に囲まれた30メートル四方ぐらいの広さの場所の中央に遺体を処理するコンクリートのたたきがある。斧と包丁が置いてある。片付けられてはいるが、小骨は少し散らかっている。たたきの傍らに火葬用の炉がある。山側に屋根のついた祭壇がある。儀式用のものだろう。経文「オンマニペメフム」を刻んだマニ石が片側に積まれている。祭壇の反対側に遺体を包んできた色とりどりの布や衣装が放置されている。

チベット族の遺体処理には五つのやり方があるとガイドのタシが説明してくれる。特別の最高位の人はミイラにして仏像に収める。高僧・貴族・金持は火葬にする。次ぎが天葬（鳥葬）で水葬、土葬の順となる。土葬は伝染病など悪い病気で死んだ者を葬る。帰国後、日本山岳会の理事会のあとスライドで紹介したら予期した以上の反応があった。東チベットの鳥葬は西チベットとは趣が違いうようである。皆さん禿わしの数の多さに驚いていた。数えきれないほどの群がっている禿わしは、餌がなくなると何処かへ飛び去る。相当広い範囲を移動すると、ガイドのタシは言う。

一つの疑問を呈したい。日本では「鳥葬」が定着しているが、中国語では「天葬」である。英語では中国語から直訳して“Sky burial”と表現している。この風習の起源は知らないが、チベット仏教の精神性を考えると、即物的な印象を与える「鳥葬」より「天葬」の方がぴったりしていると思う。日本ではいつ誰が「鳥葬」という言葉を使

い始めたのだろうか。『鳥葬の国』の著者だろうか。なぜ「天葬」をそのまま採用しなかったのだろうか。ご教授頂ければ幸いである。

■普玉の谷―未踏の水河を探る

探査の対象をどの谷に焦点を絞るか。検討資料は旧ソ連製の地形図だけが頼りである。1:1,000,000、1:500,000、および1,200,000の地図のうち、ちょうど念青唐古拉山東部をカバーする1:500,000が全体を俯瞰するのに最適である。地図を何回となく凝視しているうちに自ずから目指す谷が定まってくる。易貢措の北、南面に幾状もの大氷河が懸かっているツェンポー・怒江（サルウィン）分水嶺の北側に狙いをつける。念青唐古拉山東部で氷雪が最も発達している山塊である。北面の谷にもそれなりの大きさの氷河が地図に描かれている。旧街道に沿った公路を行き、辺坝の手前で二つの谷に入り、それぞれにBCを設定して偵察を行う。探査が終わったら分水嶺の西の峠、シャルグン・ラ（5,037m）を草^{ツェン}から越えて嘉黎まで旧街道をキャラバンするか、東の峠、トゥン・ラ（5,267m）を巴里郎から越えて南面に入り波密に抜ける二つのコースを立案する。

4月29日、快晴後曇。7:30、3℃。洛隆の街は朝が遅い。7時半になっても車の往来がない。交通量が少ない。商業活動が少ないからだろう。午前8時半出発。旧街道に沿った公路は怒江の支流を3,400mの分岐点まで下り、別の支流を上る。9時半に碩督^{ショバン}（石般多、3,480m）に着く。往時の交通の要で、探検記に出てくる村である。ここで村人に波密への交易路の峠の状態を訊ね、今はまだ雪が深くて馬は通れないが、6月になれば3日で波密に行けると言う。洛隆県から辺坝県へ公路はツェンポー・怒江（サルウィン）分水嶺の北側を主脈に平行してほぼ旧街道と同じ所を通っている。近年この公路を通った外国人の公表されている記録はドクター・クラークの隊のものだけである。

今日は旧ベンバの北側の谷、普玉の奥にBCを設定するため先を急ぐ。以下、我々の記録を日記からそのまま転記する。

10:20―ドンチョ・ラ（4,440m）通過。高峰見えず。

10:45―中亦にて波密への峠の状態を聞くが、返

事は頑督のときと同じ。峠が開かれるのはチベット・カレンダーの5、6、7、8月の4ヶ月で、現在は雪のため往来はない。今日はチベット・カレンダーでは3月18日である。40日のずれがある。中亦から巴里郎の間、公路は峠越えを避けて旧街道から離れ、北側の谷筋を迂回する。

12:00—巴里郎（中亦加果村、4,080m）着。周囲の赤茶けた風景が記憶に残る。本命のトゥン・ラ越えの可能性について訪ねるが、ここでも返ってくる答えは同じ。夏にはたくさんの人が波密に行くが、今は危険と言う。波密への分水嶺越えのキャラバンは断念せざるをえない。

12:30—洛隆・ベンパ間の一番高い峠（4,760m）を過ぎる。大パノラマであるが、残念ながら6,000mを越える高峰は手前の尾根に遮られて見えない。

14:00—拉孜（4,135m）通過。この村も探検記で馴染み深い。

14:20—峠（4,490m）を越える。旧街道は峠から西へ急な道を下るが、公路は山腹を緩やかに南に下り河原にでる。河原の谷を南に入れば第2ベース・キャンプ（BC2）に至る。

15:00—第1ベース・キャンプ（BC1）、普玉への谷の分岐点（4,050m）に着く。

ここで公路を離れて太鼓橋を渡り、開けた谷を南に進み普玉に向かう。中国の交通地図には分岐点から南西へ15km、普玉まで自動車道路が記されている。が、実際は左岸沿いの道路は寸断され、河原につけられた車の轍を辿らざるをえない。随所で川を横切らねばならないが、流れを渡るポイントを選ぶのが難しい。小雨になり霧が立ちこめる。視界が利かないなか、ソ連製1:200,000地形図で現在位置を確認する。4WD機能の故障で醜の車が砂利から抜けられなくなり、陳の車で引きずり出す。いやな予感がする。

「タシ、車で入るのが危険なら馬のキャラバンに切り換えるから、無理をしないようにとドライバーに言え」ガイドに再三注意する。しかし、運転手は耳をかさずに進もうとする。午後4時過ぎに、陳の車が流れの真中でストップ、動かなくなる。左岸の小さな村から集まってきた数人のチベット族の助けを借りて醜の車で引張るがびくともしない。万事休すである。怒っても始まらないので、

ガイドと運転手に対応を任せるが、山の偵察の予定を遅らすことはないように処置をするよう念を押す。

荷物を全部対岸（左岸）に運ぶ。永井さんは水没した車に乗っていたので、ガイドが岸まで背負う。河西さんと私は渡渉する。氷河の水は身を切るように冷たい。左岸の河原にテントを張る（4,070m）。救援を得るため、タシが醜の車でトラックを呼びに出発するが、今度は醜の車がエンコしてしまい、午後9時過ぎにようやく戻ってくる。もう一回村人と醜の車で流に嵌っている車を引張るが不成功に終わる。雪が降り始め、天気が悪くなる。インスタント・ラーメンを食べ、腹をくくってシュラフにもぐる。

4月30日、雪。8:30、0℃。タシと運転手二人は救援を求めるために醜の車で下る。一方、昨夜手配しておいた馬8頭と馬方、荷を担ぐための村人が11時頃やってくる。小雪の降り続くなかキャンプを撤収する。12時にタシがトラックを連れて戻ってくる。直ぐ村人の応援もえて救出作業をはじめが、今度はトラックが動かなくなり失敗する。ミイラとりがミイラになってしまう。午後1時、車のことは運転手任せにして、雪のなかキャンプ地を出発する。8頭の馬と村人が荷物を全部ぶ。我々は歩いて行く。午後2時半にシェル・シェブ村（4,110m）に着く。馬や人夫はこの村からきている。テントを張るより楽なので、交渉してツェワン・ソナムという人の家の物置に泊めてもらう。ここまでは一度外国人が馬で来たことがある、ここから奥には外国人は誰も入っていないと言う。一段落してダシが運転手と連絡をとり下り、7時に戻ってきた。トラックと遭難した車は放置されたままで、運転手二人は救援を求めるために醜の車ですでに新辺坝（辺坝県の行政の中心）へ発った後だった。コックのザシが初めて夕食を作る。高圧釜を使うので白飯がよく炊けている。合格点をあげる。

薪ストーブを囲み家の主と集まってきた近所の人からこの村と谷について訊ねる。

1. シェル・シェブ村は戸数10戸、70人。冬でも雪は30cmぐらい。この村では燃料はすべて薪。谷の上部の牧草地ではヤクの糞を燃やす。

- 東チベット・念青唐
Nyainqentanglha
(April - May 2002,

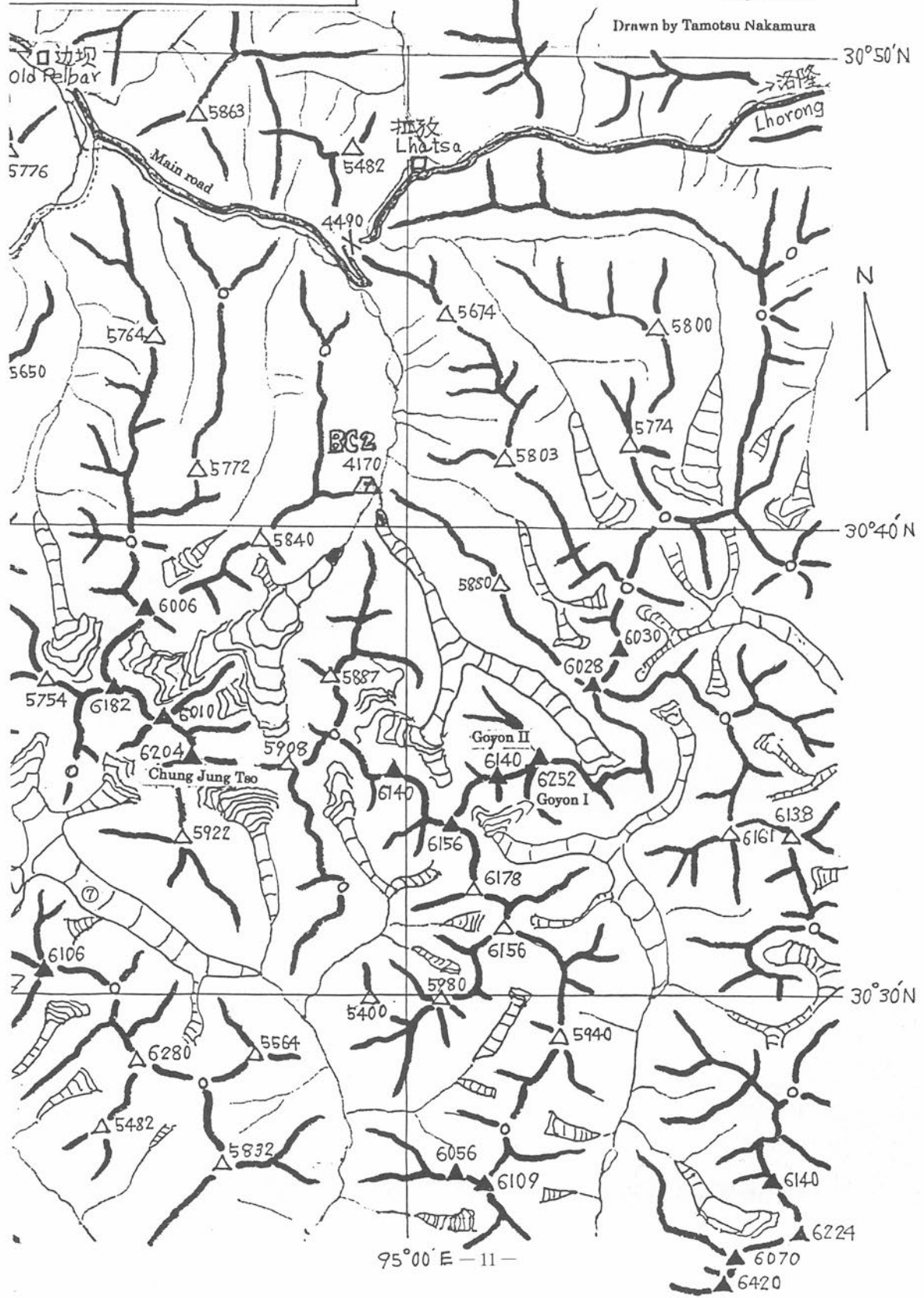


古拉山東部—中央山塊
 East • Central Part—Eastern Tibet
 Tamotsu Nakamura 中村 保)

▲ ——Map of PLA (China Peoples Liberation Army) 1:100,000
 △ ——Russian topographical map 1:200,000

Height: meter

Drawn by Tamotsu Nakamura

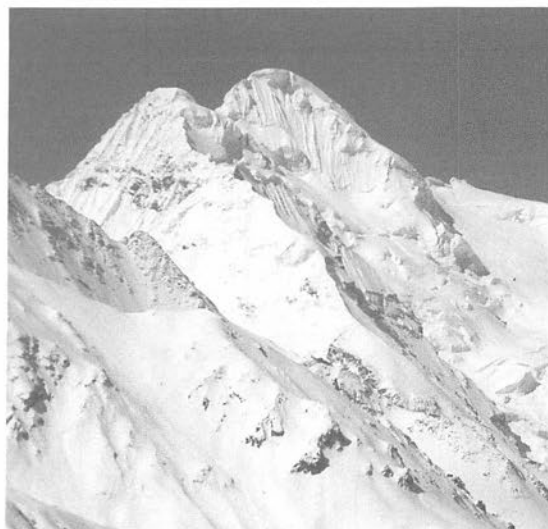


2. 冬草夏虫がたくさん採れる。シーズンが始まったので村の衆は総出で朝から採りに出かける。
3. 森林は谷の上部にあり、樹齢3,000年の木も残っているが、既に相当伐採されてしまった。コンボ地方（筆者注：この谷の奥の分水嶺を越えた南側、工布江達から八松措にかけての地方）は森林資源が最も豊かなところであるが、1990年頃伐採が始まった。政府が知らないうちに大量にトラックで搬出され、闇で売り捌かれた。その後政府は規制したが既に相当伐採されてしまった後だった。

夜半急に冷え込む。満点の星空、明日の天気を約束する。

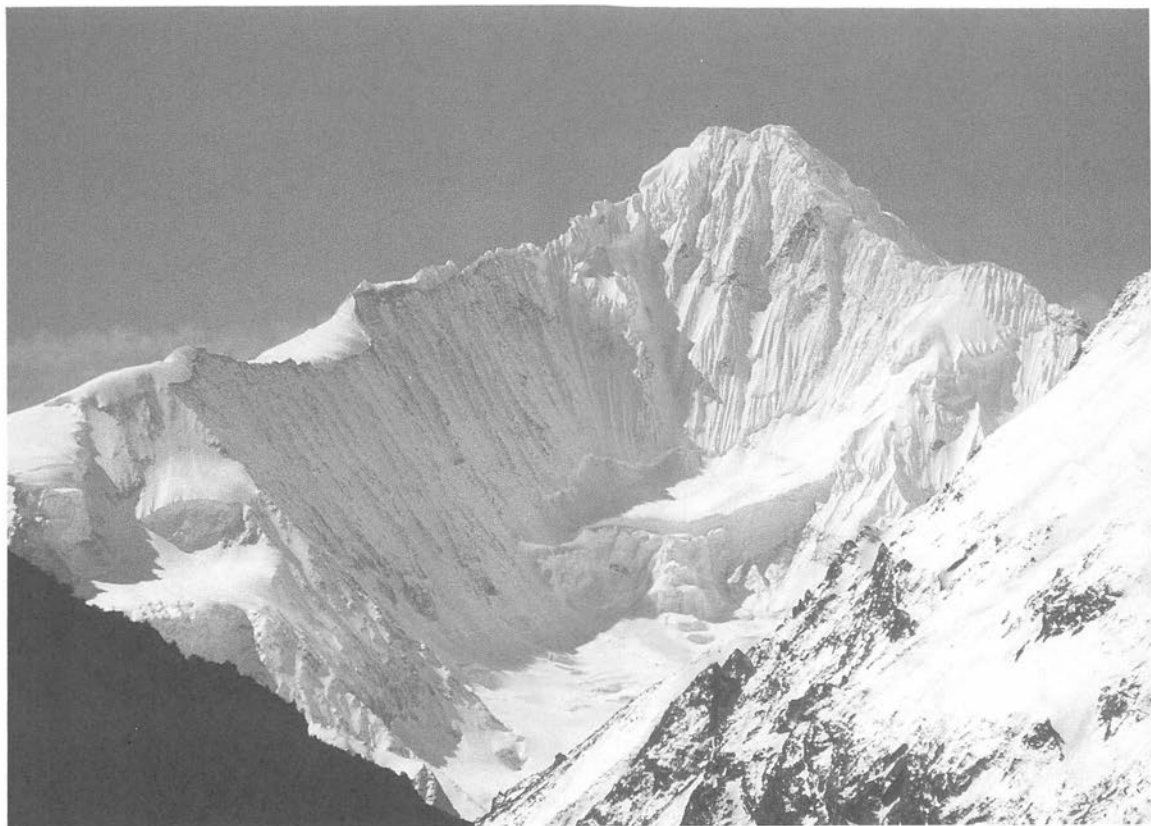
5月1日、快晴。一人夜が空ける前に起きて写真を撮りに左岸の雪の斜面を上る。谷の奥にヒマラヤ巒の均整がとれた氷雪のピラミッド、コナ峰三山の東の2峰が徐々に姿を現わす。頂稜がモルゲンロートに染まり、やがて陽光は下部の氷河にとどく。未知の山との遭遇の一瞬、至福の時である。辺境の旅の苦労が報われる。放牧に向かうヤ

▼普玉の谷（右）無名峰（6,090m）北面



クの群れが谷を上って行く。7:00、マイナス8℃。カメラを持つ指先の感覚が失せる。

午前10時前に馬のキャラバン出発。広く開けた平坦な谷を南に進む。左岸にある普玉の村落には小学校がある。大勢の村人が出てくる。正面に6,000m峰が立ちはだかり、谷は東西に分かれる。



▲普玉の谷（左）コナ峰（6,488m）北面

それぞれ氷河を擁し、その奥にツェンポー・怒江（サルウィン）分水嶺の雪峰が連なる。左手の谷に堂々たるコング峰（6,488m）北面が姿を現わす。南面は大きな若果氷河の源頭である。頂上の大きな雪庇から下部の懸垂氷河に薙ぎ落ちる氷雪の襞が美しい。存在感は大きい。正面左右の山裾には氷河が削られた氷蝕の痕が明瞭に数十メートルの高さで帯状に続いている。氷河の後退を物語っている。氷蝕の痕跡は崗日嘎布の拉古氷河と類似している。谷の二股の少し下にモレーンの末端があり、その袂に放牧小屋がある。コナ峰三山が見えてくる。標高は東からⅡ峰6,334m、Ⅰ峰6,378m、Ⅲ峰6,328mである。因に山名は馬方から聞いたものである。

12時過ぎにモレーンを越えた地点、右の谷へ少し入った河原にベース・キャンプBC1（4,180m）を設営する。ついてきた村人が手伝ってくれる。初めて訪れる外国人との遭遇は彼等にとっては事件なのであろう。一休みしてBC1を出発し右手の谷に入る。生成しつつある氷河湖の左岸のヤク道に行く。山側は断崖で落石の危険が絶えない。岩屑に蓋われた起伏の多い氷河の末端に取付く。1時間半ほど喘ぎながら登り、緩やかな氷瀑の手前（4,300m）から引き返す。この氷河はコナⅢ峰北東面の懷から下っている。全長約8kmある。後退しながら氷河湖を造りつつある。南側が易貢蔵布最大の全長35km、恰青氷河である。午後5時半にBC1に戻る。曇ってくる。夜雪になる。

5月2日、雪後曇。7:00、0℃。雪は止み、高雲となり薄日がさしてくる。春の雪なので直ぐ消える。GPSとソ連1:200,000地図でBC1の位置を確定する。普玉村の子供達がヤク、羊を放牧にやってくる。午後、谷を下り偵察に出かける。青空が広がり、遙か高みに薄絹を剥ぐようにコング峰が姿を見せる。夜になっても暖かい。気圧は下がり、星は見えるが天気は悪くなる兆しである。

5月3日、小雪。7:00、0℃。午前中は停滞する。午後二時半にゴンガ峰のある左の谷の氷河を三人で偵察に出かける。BC1の横を流れる幅10mほどの川の渡渉が面倒なので、コックのザシに負ぶってもらって渡り、左右の谷から流の合流点の山側にあるモレーンを横断する。ヤク道を辿

るが、幾条にも起伏があり予想以上に時間がかかる。左の氷河の氷蝕が間近に見てとれる。砂礫で蓋われている氷河の末端と氷舌がよく見える河原まで行き、そこから引き返す。左の谷にはまだ氷河湖はできていない。左の谷の氷河はソ連1:200,000の地図で見る限り右の谷の氷河より長い。コング峰の左右から二つの氷河が流れ下り合流している。末端から合流点まで約4km、その先右（西側）が約2km、左（東側）が約6キロの長さをもつ。合流点の氷河の幅は2kmぐらいいろう。下から見ると緩やかに盛り上がった氷瀑のような状態になっている。地図にはコング峰の東3kmのところ、分水嶺上に6,445mの顕著なピークがプロットされているが、これは北側からはコング峰の尾根に遮られて見えない。左氷河の分水嶺の南側は長さ18kmの那龍氷河である。

5時にBC1に戻る。雪から雨に変わり本降りになる。冬虫夏草採りの三人の少年がBC1にくる。永井さんが交渉するが、1匹5元から譲らないのでまとまらない。3年前と比べると3-4倍の値段になっている。どうやら1匹5元は相場のようなのだ。

陳の車が連絡にくる。救援はうまくいったようだ。予想外に早く戻ってきた。魏の車の4WDも修理したと言う。2日後BC1撤収を決めて、明後日下山のため2台ともBC1にくるよう指示する。夜雪となる。5cmほど積る。

5月4日、雪はやむが雲は厚い。8:00、0℃。雪が降ったり日が差したり、朝から不安定な天気だったが夕方から晴れてくる。午前中散歩に出かけたところ、チベット犬に追いかけて山側に逃げる。恐ろしい思いをする。午後2台の車がBC1にやってくる。日が落ちると気圧が上がり、気温が下がる。星空になる。

5月5日、快晴。8:00、マイナス5℃。寒いほうが気持ち引き締まる。BC1を撤収する。第一ラウンドの成果に満ち足りた気持ちで午前10時BC1を後にする。公路に近づいて後ろを振り返ると、谷に入るときは雲に隠れていて見えなかったコナ峰三山が我々を見送ってくれる。旧辺坝、旧街道との分岐点である草辺坝を経て午後2時半に新辺坝に着く。 一つづくー

ヒマラヤ・デジタル通信は凄い!!

中川 裕

ヒマラヤ・デジタル通信突然の復活であります。目玉はヒマラヤ関連のウェブサイトとして頂点を極めてきた everestnews.com を凌ぐサイトが遂に出現。そのアドレスは

<http://www.mounteverest.net/>

であります。

everestnews.com はウィンドウズ95が世に出て、インターネットの利用者が核爆発的に増加した時から今日まで、ヒマラヤのみならず登山に関連するホームページの中で不動の位置を築いてきた。しかし、この種類HPの宿命で、この3年ほどはあまりにも膨大な情報を有するがために、このサイトの中から適切な情報を得るには、かなりの英語力と忍耐が必要になってしまった。例えば、11月20日の everestnews あらたに登場した見出しは23項目にも及ぶ、その一つ一つに別のページが用意されており、その全てに目を通すには大変な労力を要する。

Mounteverest.net は必要な情報が分かりやすく、不必要な修飾が施されていない実質本位の情報が手に入る。そして何より、このサイトは下に表した三つのサイトと連携して、驚くべき情報量を明快に提供してくれている。

<http://www.k2climb.net/>

<http://www.adventureweather.com/>

<http://www.adventurestats.com/>

k2climb.net

この夏の日本ヒマラヤ協会カラコルム隊からこのHPを聞いたことが、私がこのサイト知ったきっかけである。

昔からネパールではカトマンズ在住のホーリーおばさん事、ミス・エリザベス・ホーリーさんが、下山してきた登山隊に直接取材した情報を基にしたホーリーレポートを年2回出ており、ネパールヒマラヤの情報の整理が大変効率よく行われるもとを築いた。

彼女は自己申告がものをいう登山の世界で、登頂の真否をその取材から明らかにして、彼女の判断した情報を我々に提供しており、登山者の中には彼女にその登頂を否定されている人も少なくない、まさに生き字引的存在である。

ところがカラコルムにはそうした役割を果たしている人間が見当たらず、ヒンズークシュなどを中心に、明らかにされていない登山記録が多々ある。

その中でパキスタンにあって唯一山岳ジャーナリズムを担っている男が一人いる。「ネイション」の記者、アセム・ムスタファ・アワン氏だ。昔からアメリカン・アルパイン・ジャーナルやマウンテンにその名を見ることができる。氏がかかわっているこのサイトは、アワン氏の取材によるH A J隊の状態、スパンティーク（7,027m）での遭難もきちんと掲載されており、無駄な情報が少なく、誇大化されていない表現でとても分かりやすく掲載されていて感心した。

adventureweather.com

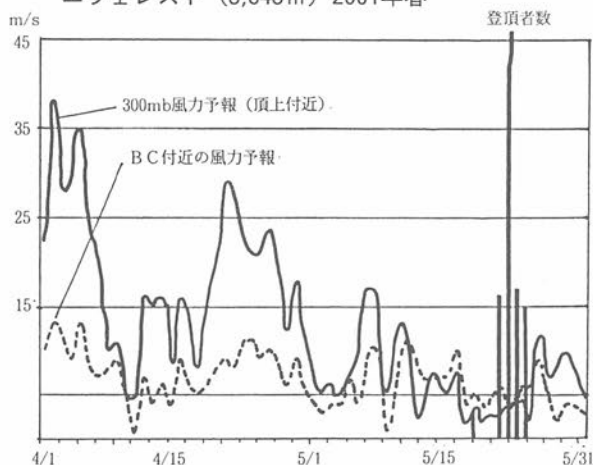
ヒマラヤの天気予報というとてもないことに對して、科学的な情報を提供し、予報とエベレスト、K 2（8,611m）の登頂者数との関係をグラフにまとめるなど分かりやすく解説したページだ。

アミカル隊を率いて度々高峰登山をしているガイドのラルフ・ドーモエヴィチやトーマス・フーバーの利用していた天気予報会社も、たしかインスブルックであったと記憶している。十分に理解できない部分も多いが（まじめに読んでない為なのか、はたまた能力不足？）これからのヒマラヤ登山の有効な手段として、参考にしていただきたい。

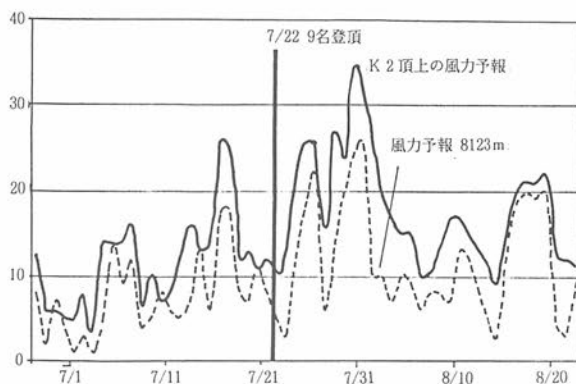
情報を提供しているのはスエーデンの気象・水圏研究所及びヨーロッパ中央中緯度観測所と成っている。

▼adventureweather.com「登頂者数」と予報

エヴェレスト (8,848m) 2001年春



K 2 (8,611m) 2002年夏



adventurestats.com

このHPには驚嘆してしまった！

元来ヒマラヤの情報の整理に関して日本人が最も整理されている、と考えていた。ところが、世界には同じようなことをやっているマニアが一杯いることを実感させられた。

ここで公開されている情報はエベレスト、K 2、カンチェンジュンガの全登頂者、14座うちの6(座)以上登頂者、エベレストとK 2 (8,611m) 両方の登頂者、ビッグ3の登頂者、ビッグ3とも無酸素で登った者、8千メートル峰の高齢登頂者などなど等、様々なカテゴリーで分類整理されたデータには驚くばかりだ。

よくも集め、整理したと思うし、それを惜しげもなく公表している姿勢に完璧に打ちのめされた。おそらく、こうしたデータに対して対価が支払われているのだろうが、それが無料で公開されていることには驚きがある。

この膨大なリストを見ていて思うことは、70年代から80年代の日本ヒマラヤ登山界のレベルの高さである。

ビッグ3 (エベレスト、K 2、カンチェンジュンガ) を最初に登ったのは当然メスナーだが、2番目は川村晴一、3番目山田昇、4番目はククチカでなんと5番目は名塚秀二だというからおどろきだ。ちなみにメスナーは1982年、川村83年、山田85年、ククチカ86年、名塚は91年5月である。ちなみにこのリストはまだ29人しか載っていない。

またエベレストを両側から登り、さらにK 2に登っているのは11人、当然トップはメスナーで80年、2番手は山田昇で88年5月である。このリストを作成した努力と、HPに公表されている事実には、世界中にいるこの手のマニアの悲鳴にも近いため息が聞こえてきそう。尚、日本人データのチェックはH A J山森理事長に依頼されている。

さらに11月20日現在3月1日からの今日までのダイアリーがあり、各々の日にその日に生まれたクライマー、初登頂された山、その日に亡くなった人の名前などの登山史が掲載されていて、なかなか楽しめる。

当然、これらのデータ中には間違いもあるはずだが、公開されたことにより、今後は世界中の人によって手が増えられ、更に充実していくだろう。皆さんも間違いなどあったら是非知らせてあげてやって欲しい。そのようにしてこのデータバンクは更に充実していく。

このほかの極地の冒険をまとめたページなど、いくつかのHPで構成されたこの巨大な山岳・冒険ウェブサイトは、改めて記録の収集整理が大事なことなのか、更にその提供の仕方について考えさせてくれる。日本でも海外登山情報センター構想の実現に向けて前進させたい。

冬の夜長、辞書を片手にこんなデジタルワールドを覗いてみるのも面白いかもしれない。ちなみにデジモンはいません、念のため！

地域ニュース

《中国》

カンプー・カン(7,204m)初登頂

前号で韓国隊がシモ・カンリ(7,240m)に初登頂したことについて紹介したが、ボスコ山岳会のホームページの登山計画には、シモ・カンリとして下段の写真の左端の山が載っており、登頂予定ルートが書き込まれていた。この山については「ヒマラヤ349号〜351号」表紙写真で紹介した、ブータンとの国境にある「カンプー・カン」である。中国側の地図には、7,202mや7,204mの標高が与えられているが「山名」は記入されていず、南側に「什磨日」と山名を付けられた6,902mや6,889mの標高を与えられた山があるので、山名はこれを用いたものと考えられる。

この一帯は、1999年JAC隊が、ガンカル・ブンスム登山を主に国境問題で中止した経緯があるが、今国の韓国隊の登山により、その問題は解決したことになる。尚、下段写真の右端手前は、トンシャンジャブー(7,207m・HAJが申請済み)、その左奥がテリ・カン(7,125m)である。

《ネパール》

タルン・ピーク(7,349m)登頂断念

ヒドンヒマラヤ・クラブが、カンチェンジュンガ山群のタルン・ピークに派遣した登山隊(林雅樹(38)隊長ら4名)は、10月21日C3(6,400m)から頂上アタックを行ったが、核心部を抜けた所で大規模な雪崩に遭い、その先の緩斜面に不安定な雪が溜まっていて危険性が高かったため登山を中止した。最高到達点は6,700m。尚、今秋のネパールは冬の到来が早く、10月15日頃から風が強くなっ

た。又、今夏ネパール各地に洪水をもたらした異常な降雨の影響が山の高い所に不安定な雪の層を出現させている模様。

ニレカ・ピーク(6,159m)初登頂

2002年9月18日に、新たにトレッキング許可ピークとして解禁された同峰が、10月29日、ヒウン・チトワ登山隊(近藤和美(60)ら2名)の近藤、プルバ・チリによって初登頂された。

ナグバイ・ゴスム(7,312m)で発砲事件

ネパール、クーンブ山群のナグバイ・ゴスムを目指していたアメリカ隊の2人が、9月28日、中国との国境付近で中国人とみられる兵士から発砲され登山を断念した。事件は、国境からネパール側に12km入った5,100m地点でライフルを持った軍服姿の中国人とみられる男と出会い、食糧と水を求められ与え別れてしばらくして発砲されたものの。

Books

遠き雪嶺

『雪の壁を大きく切り取って、踏みしめた足先に全身をたくししながら身体を半ば横に向け、ピッケルをふるって蔽いかぶさる雪庇を少しずつ前に打ち落とした。雪庇がかけ、そこから片手を伸ばして頂上の雪にピッケルを深く打ちこんだ。もう一方の手で雪庇の端をたたき割った。大きくあいた穴から両腕を頂上にかけてがんばると、身体ははずみ上がった。瞬間、視界は開け、自分より高いところは見当たらない。頂上に来た。』

ちょっと引用が長くなったが、冒頭の文章は、堀田弥一著「ヒマラヤ初登頂—1936年のナンダ・コート—」(筑摩書房)の登頂に成功した瞬間の模様である。

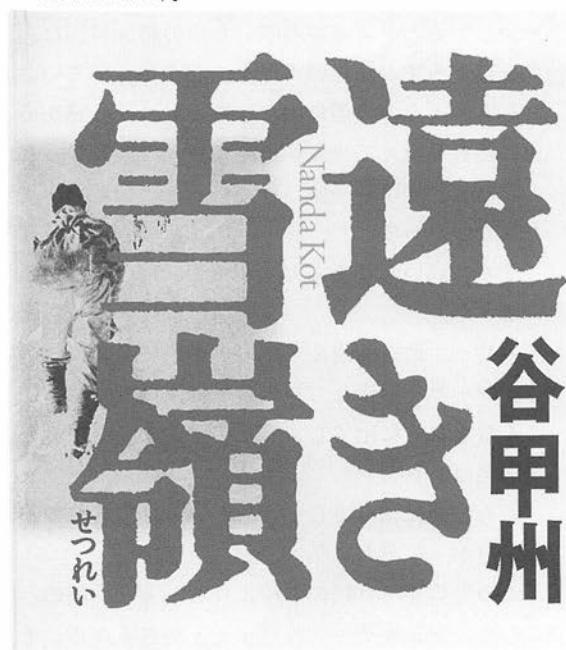


本書、「遠き雪嶺」は、日本初のヒマラヤ登山となった戦前の立教大学隊のナンダ・コート登山を題材に「新田次郎賞」受賞作家「谷甲州」が、昭和の最後の年、1988年七夕に75歳で逝去した、浜野正男隊員の目で語る作品。

ヒマラヤ登山を自ら実践する作者が渾身の力で書き上げた力作。因みにこの作品に女が絡む場面は出てこない。

評者が「ヒマラヤ」に連載中の「日本隊のヒマラヤ登山50年の記録」は、戦後を取り扱っているが、戦前唯一の日本隊の記録が、このような作品によって知られることは嬉しい限りである。

また前掲した「ヒマラヤ初登頂」の巻末には、堀田と原真の対談が載っており、興味深い内容であるので、合わせて一読を勧めたい。(記：山森)
角川書店 価格1800円+税 386頁 単行本
2002.10.15刊



ヒマラヤの白い山-DHAULAGIRI I (8,167m)

2001年、京都岳人クラブを派遣母体によって行なわれたダウラギリ登山の報告書。

このダウラギリ登山は、京都岳人クラブが北東稜ルート、東壁を目指す群馬ミヤマ山岳会が東壁ルート、で登山申請を行ない、それぞれにメンバー全員を登録する事によって両方のルートの登攀を

可能とした。西洋の登山隊はこの様に申請上で一つの登山隊にまとめる事により高額な登山料をシェアしあう事は以前から行われてきた。日本でも今後こういった方式が増える事であろう。ただ、お互い、しっかりと打ち合わせが必要不可欠となる。

登山結果は、京都隊は北東稜から一名が登頂、同じく単身群馬隊に参加していた名塚氏も登頂を果たす。しかし、残念ながら東壁を目指した星野、品川、福本の3名は行方不明となってしまった。

本書で印象深いのはこの登山隊を引っ張っていった山田氏の登山スタイルのこだわり、ルートへの想いが随所でひしひしと伝わってくる。又、「ダウラで思い知った私の体力」の項では60歳を迎えた宮川氏の「8000mのノーマルより、人の居ない6、7000mを」「組織登山より、小人数で」そして「ベースから上は自分で荷揚げする」「出来るだけアルパインスタイルにこだわる」といった故須藤氏との関わりに触れ「そういう登山が出来なくなったら、山登りを止めような」と言い合ってきたらしい。そして「登頂できそうになったとき、登頂断念する時も、後悔しないため今まで以上のトレーニングを積もう」と決意し、実践された。まさに頭が下がる思いである。

本書はパソコンを駆使し製作されているが、豊富なカラー写真、内容も登山活動の記録、随想、遠征資料と盛りだくさんとなっている。

(記：野沢井 歩)

A 4版 132P (カラー13P)

京都ダウラギリ I 峰登山隊2001

京都岳人クラブ・京都山岳会 2002年10月発行

〒657-0845 神戸市灘区岩屋中町5-2-21

ルゼフィール岩屋中町509号 山田良二方

e-mail:ryo@kobe.email.ne.jp

東京集会のお知らせ

日 時	12月24日 (火) 午後7時～
内 容	忘年会
場 所	HAJルーム (地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

ロー・マンタンの空、遥かなり(7)

カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

タート・パーニーからガーサへ

高橋 照

毎日のことではあるが、例によって私達のポーターは朝の6時には出発して行った。私達も7時には出発していた。峠を少し下り、左手の森の中に近道がある。15分位街道に行くよりは近い。土谷が私を追い抜いて石楠花のジャングル(森林)の中を飛ぶように降りて行った。街道は馬の往来が激しいので道は悪いが、近道の林道は落葉の積もった小道なので、足の感触が心地よい。もうこの辺で街道に出る道がある筈だと、あたりを注意して見たところ、まだ土谷の足跡が落葉の中についている。ははあ、土谷の奴間違っ行って行き過ぎてしまったなあ気がついた時は、もうかなりの距離を私も下っていた。隊商の鈴の音も既に遠ざかり小沢のせせらぎの音も聞こえなくなっていた。

私は7、8年程前にこの尾根道を間違っ下ったことがある。それは残雪の中に馬の足跡があったので間違っのだ。そして、その時はシーカ村の真上の稜線に出たので、シーカ村を目指して家畜の牧草道の急な山腹を下ったことがある。私は今度はもっと手前から降りようと道を探した。真正面にはドゥラギリ主峰の南壁が対角から眺められ素晴らしい道だった。それにしても、土谷は何処まで行ったのだろう。放牧のカルカがあって村人が3人程いた。私は、

「シーカに下る道はあるかね」というと、

「道はないけどカルカ道なら沢山あるから、なるべく低いところを行かないで降りればシーカに行く大きな道に出るだろう。谷に入ってしまうと行止まりになることがあるから」と教えられたので、彼等に一礼し斜面のふくれ上がったところをよって下った。やがて斜面が雨で掘られた窪地が続いてるところで、一人の老人に会った。

「大きな道に出るにはこれ下っても良いかね」

老人は、

「もっと上の方に戻って、あのふくれた斜面を下った方が良いよ」というので、又再び上り直し、彼に教えられた斜面を下った。比較的大きな農家にその細道は続いており、道はブツリとそこできなくなっている。農家の石垣を乗り越えて中庭に入ると、女の子が一人いて、この窪みを下ると大きな道に出られるとあって、わざわざ水の濁れた石ころだらけ小沢まで連れて来て貰った。急なガレを少し下るとタンポポの咲いた草の斜面に出た。下を見下ろすと私達のポーター連中が歩いていた。

ああ、とうとう道に出たなあという安心感から、急に疲れを覚えて来た。道路の真上の段になったところで、煙草を一服つけていると、菊地君が下を通りかかって、

「そんな高いところまで上がって、何をしていますのですか」

「いやー、道を間違えて尾根道を来てしまったので、シーカー目指して見当つけて下って来たら、こんなところに出てしまったのですよ」というと、菊地君は、

「私も一緒に休みましょう」といって急な草の斜面を上がって来た。私は、

「この先のシーカ村の学校よりちょっと手前のところに、シェルチャンのバッチィがあるから、そこで飯にしませんか」といいながら、この尾根道は前にも這って下ったことがあることを話した。そして、

「この尾根はすごく眺めの良い道で、歩き良い道ですよ。ドゥラギリを眺めるなら抜群の道です」と説明した。本当にこの尾根道は上のジャングル(森林)地帯は落葉道で石ころ一つなく、それよりは草原の広い尾根となって、羊があちらこちら

▼タートパーニーから見たニルギル南峰



に放牧されており、まばらに石楠花の大木があった。時間にしても、本街道と余り違わない。

20分位本街道を下るとシーカの村についた。菊地君は既にシェルチャンのバッチィのヴェランダで休んでいた。タシもキショールもリエゾンも大部前から休んでいるようだった。タシが、「このファーバルコ・ロティ（ソバ粉のパン）は美味しいから、バーバーも食べたら」という。菊地君も、

「ソバ粉のパンはなかなか美味しいですよ」というの中に、このアマが私にロキシーをコップに入れて差出して来た。彼女の挨拶がわりである。「チョリー（娘）達は？」と聞くと、カトマンドゥーに一人は行っているが、バイニー（妹）の方はその中に来るだろうといっている中に表から入って来た。

私達はこのシェルチャンのバッチィで、2時間以上も休んでしまった。そして、正午頃シェルチャンのアマやデディに別れを告げて、シーカ村を後にした。

だいぶ昔のことではあるが、東京工大の人達がここに水道を建設した。ちょうど学校のある前の秋桜の大木の下である。シーカの村人達はこの水道を大変喜んで有意義に使っている。その後、川喜田さん達のグループが、民間の人達による援助として、簡易水道や山から薪や石材を運ぶワイヤーの無道カリフトを建設し、シーカ村周辺の村人達に大変喜ばれた。だが、今はその影すらない。恐らくワイヤー・ロープや、ビニール・パイプは誰かに持ち運ばれ、都会や他の村に売られたのだろう。東京工大の水道だけ残っているのも不思議で

ある。もっとも、東京工大の造った水道は土の中にパイプを埋めて造られているので、そうやすやすとは盗めないからであろう。

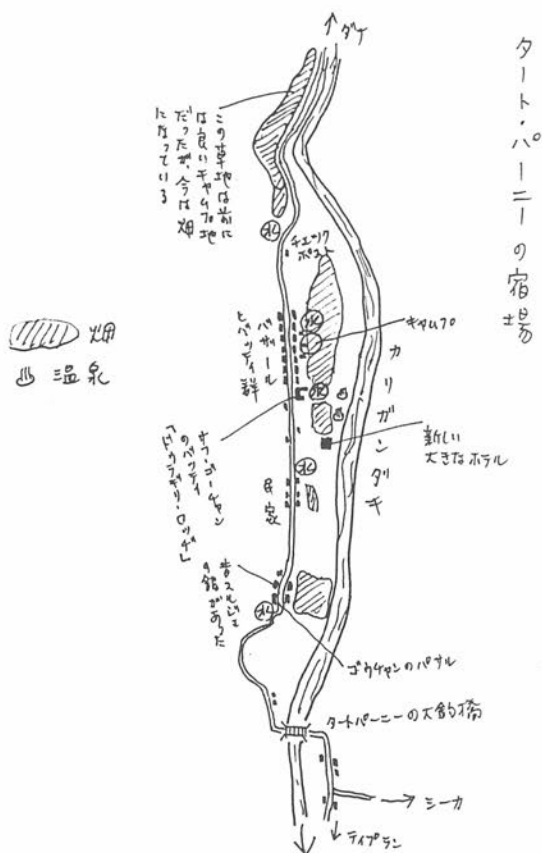
道は暫く石畳の緩い下りになる。道路わきの下にゴウチャンの隊商宿がある。宿の前は広場になっていて、隊商の家畜達が休める十分な広さがある。ところが、ゴウチャンの家もご時勢か、庭の広場の上に道路に面してレストランを出した。英語の看板やメニューが表に書き出されていた。ヨーロッパ人のトレッカー数人が、中で昼食を食べていた。シーカ村のタカリのバッチィは、私達が昼食に立ち寄ったシェルチャンとこのゴウチャンの2軒である。

1時間近くでガーラの村を通り過ぎる。この村はほとんどチェットリーが住んでいる。チェットリーは商業民族とは全く違う農民なので、この村だけは何回通っても、ちっとも変わっていない。それでも改装したバッチィ1軒と新しいバッチィ1軒が出来ていた。

ガーラから石段の道を少し下ると、道は又緩い良い道になる。小沢を幾つか渡ると、道は少しづつ登りになり、やがて大理石の階段道になって小さな峠にでる。昔は峠の台地に露店が出て、ミルク・ティやスントラ（みかん）を売っていたのだが、今は立派な石造りのバッチィが1軒建ち、ビールやコーラを売っていた。道はこの峠から急角度で、カリガンダキの本流まで一気に下っていた。下から上がって来たら、誰でもこのバッチィに寄って一息入れることになるだろう。

この道はカリガンダキの本流まで一気に、500m以上も下る急な道で、1時間はたっぷりかかる。宿営地のグレパーニーより1日がかかりで、高度差1700mの下りである。ジョムソム街道で、グレパーニー峠よりの道が一番急で長い。4時頃私はやっとカリガンダキに懸かる長い釣橋に出た。どうも私が一番遅れたようである。峠で一緒に休んだ隊員達やポーター達も、もう何処にも姿を発見することが出来なかった。

タート・パーニーの村に入り、村の入口にある「スルジェの館」は閉まっていた。一昨年のネパール政府のビザに関する法律の大改正以来、ご主人の平尾君は日本に戻っているという風聞をちらっ



と聞いたことがある。村人に聞くと、細君のスルジェは今はボカラのペタワールの湖畔でロッジを開いているということだ。スルジェの母親も、一族も皆一緒にボカラに行ってしまったのだろう。今は往時をしのぶ建物だけが、戸の閉まったまま残っていた。

タート・パーニーの温泉場の近くに、大きなホテルが建っていた。十人程のヨーロッパ人の旅行者が、ホテル前の広場のテーブルで、くつろいで居る。タート・パーニーも随分変わったものだと驚きの目を見張った。もうこの街道筋では、土地の人以外は土間の上にむしろを敷いて寝ることは、と既に過去のものとなったようだ。

新しいホテルより数分で、タート・パーニーの大地主、サフ・ゴウチャンのバッチィがある。やはりだいぶ改装して明るい食堂や、立派なベッドが入っていた。名前も、ドゥラギリ・ロッジと名を付けられていた。ただ変わらないのは綺麗なみずのほとばしるダラ（水道）と、スントラ、ヤカガティ（ライム）やニブア（夏みかん）の林が

美しい。まだ、収穫期には間が遠いので、実はまだ小さく青かった。私は黄色いミカンのたわわについた木々の背景に、ニルギリ南峰の峙っている風景がたまらなく好きだ。

サフ・ゴウチャンの家には、私達の隊は泊まっていなかったで、長男の細君に差し出された大きな太いバナナを一本食べて、帰りには必ず泊まるからといって、ドゥラギリ・ロッジを後にした。タート・パーニーのバザールの中ほどにシェルバのポーターが一人立っていて、今日はここ泊まりですと案内してくれた。バッチィの裏庭にある、隊商の家畜達をとめるプールが二つあって、天幕はそこに張られており、炊事場は母屋の傍らに作られていた。私はコックのニマに、

「どうしてサフ・ゴウチャンの家に泊まらなかったのだ」と聞くと、ニマは、

「キャラバンは全行程天幕に泊まれと隊長にいられておりますのでー。ゴウチャンのバッチィの中庭は石畳が敷きつめてあるので、このバッチィの庭にしました」と答えた。夜はTBSのスタッフが、ジェネレーターでバッテリーの充電をしたので、久しぶりに電灯がついた。食糧係りは今夜飲むロキシーを買いに行ったが高いので驚いていた。今やタート・パーニーはこの辺では唯一の消費地になっているようだ。そのかわり、都会で手に入りたいがいの食糧や缶詰類は手に入った。

翌朝もポーター達は6時に、私達は7時にタート・パーニーを発った。集落の外れの水場の前にチェック・ポストがあった。警官がかなり詳しく私達のトレッキング・パーミッション（旅行査証）を見て台帳に記入したので、

「この先のダナでも同じようなチェックをするのですか」と尋ねると、

「ダナには今はチェック・ポストはない。この先、ジョムソムまではチェック・ポストはないです」という。道理で詳しくチェックしたのだと初めて納得する。チェック・ポスト前の広い草地だったキャンプ場は、今は石垣で囲われ、中にはアルー（じゃがいも）や野菜類が植えられていた。晴れ渡った朝のカリガンダキ沿いの道は気持ち良かった。さわやかな朝の水のようにやわらかな大気の中を歩くことは素晴らしい。まだ、太陽の直射に

ダナの集落を過ぎ、河を渡ってタカリの富豪達の避寒地を通る。ここもダナの村ではあるが、全部タカリ達の別荘である。大きな立派な石造りの建物が立ち並び、中庭にはスントラの林があって石垣の上にはそれぞれ花麒麟の花が咲き乱れていた。このタカリの集落の入口に、小さなバッチィがある。シェルチャンの家である。私はいつもここを通るたびに立ち寄ることにしていた。畑で仕事をしていたシェルチャンのご主人が、目ざとく私を見つけてやって来た。奥へ上がれといわれたが、今回は団体行動をとっているので時間がないからといって、入口のヴェランダに腰掛けた。奥より細君がタカリ絨毯を持って来て私の腰掛けているところに敷いてくれた。私は紅茶を飲みながら1時間ばかり、チュルチャンと雑談にふけた。菊地君も、キショールも、タシもここを通りすがり、皆お茶を飲んで休んで行った。リエゾンのビーム・バードルは立ち寄らないで通り過ぎて行った。「奴にお茶なんか飲ませなくてもいいよ」とタシが言った。キショールはただ笑っているだけである。菊地君はなにも言わなかったが、リエゾンとの間に何かがあったに違いない。

対岸のガーサに渡る橋のところで、雨も小降りになって来た。ガーサの旧道に出たところに、ブリキ板にペンキで書いたホテルの看板が目に行く。ここでも新しいホテルが出来たようだ。私はガーサのように谷がせまっているところに、良いキャンプ地があるのかどうか半信半疑であった。ガーサでは何時もバツティにしか泊まっていないので、キャンプ地など全く関心がなかったからである。

露营地の草原には夕もやが棚引き、折から追いつけられて来た隊商の馬や、カッチャルが先を争って先程の夕立の雨水を一杯吸いこんだ牧草に向かって、斜面を駆け上って行った。

日本ヒマラヤ協会創立35周年記念 講演会&祝賀会報告

2002年9月28日（土）、本会の創立35周年を記念して、講演会と祝賀会が東京、東池袋の「かんぽヘルスプラザ東京」を会場に開催され、多くの参加者を得て盛大裡に終了した。

■ 講演の部

中川裕常務理事が司会進行を担当。開会に当たり、酒井國光会長から35周年について挨拶があった後、講演会に入った。

講師は、1982年4月～1994年12月までH A J事務局に専従し、その間、ネパール、インド、ブータンで多くの登山を实践し、H A Jの歴史を熟知している尾形好雄常務理事がスライドをパソコン処理した画像を駆使して、ヒマラヤの東から西へと、H A Jが試みた山々を中心にエピソードを交えて知られざるヒマラヤの魅力を熱く語った。

（参加者90名）

■ 祝賀会の部

野沢井歩専務理事が司会進行を担当。開宴に当たり、酒井國光会長から35周年記念行事の紹介などの挨拶の後、ご来賓を代表して、日本山岳協会・田中文男会長・日本勤労者山岳連盟・西本武志理事長・日本山岳会・大塚博美会長・H A T - J・神崎忠男理事長から、それぞれ身に余るご祝辞を戴いた。また、折から来日中の1981年H A Jとネ

パールの合同による「ランタン・リ（7,205m）」登山隊（初登頂に成功）の連絡官を務められた、ラジェス・ボンゴ夫婦が紹介され、ご挨拶を戴いた。
引き続き、東京都山岳連盟・森谷重二郎会長の



▲右上からご挨拶される田中文男、西本武志、大塚博美、神崎忠男の各氏。左下はH A J 酒井会長。



ご発声で祝杯が挙げられた。会場ではアチコチで全国から参集した会員たちが懇親を深める様子が見られた。

山森欣一理事長の締めの挨拶では、H A Jの次期役員改選時には、執行役員の世代交替を進めたい旨の発言があり、祝賀会はお開きとなった。参加者は102名。なお、祝賀会参加者には、405頁のH A J創立35周年記念誌「雪の住処 35年の記録」が贈呈された。(記念誌は残部があります。)

■ 御 礼

H A J創立35周年記念行事の実施に当たりまして、会員の皆様に資金協力をお願いをして参りましたが、多くの皆様のご協力によりました、記念誌の発行、講演会&祝賀会、記念トレッキングを終える事ができました。これまでに寄せられました会員の皆様のご協力に対し心から御礼申し上げます。ありがとうございました。(山森欣一)

H A J 創立35周年記念トレッキング隊の概要

1. 期間：2002年10月13日～23日 (11日間)
2. 場所：ネパール、ダウラギリ山群
(ジョムソン、ムクチナート)
カトマンズ～ジョムソン間は航空機。
3. 隊の構成：隊長 [野沢井歩 (38) 専務理事]
秋吉紀代子(62)、荒木仁美(64)、井沢士郎(40)、石田里千代(52)、大峽美枝(60)、堅田秀子(51)、佐藤千恵子(52)、澤田幸子(61)、芝田のぶ子(66)、高橋孝江(61)、仁木紀子(62)、長谷川和雄(56)、畠山奈ミ子(65)、早船光昭(41)、村上淑子(63)

創立35周年記念行事支援金リスト

(2002年11月30日現在)

- [30口] 山森欣一、[20口] 丸山博司、
[10口] 稲田定重、酒井國光、鈴木雄一、八木原
 窓明、
[5口] 遠藤登、尾形好雄、岩崎洋、中川裕、野
 沢井歩、樋上嘉秀、
[3口] 柴田金之助、古原和美、名塚秀二、戸谷
 薫、保坂昭憲、中岡久、天城敏彦、松館正義、
 小島守夫、伊藤正毅、石川龍彦、井上功、植
 松秀之、片岡邦夫、出口當、中村武昭、長谷
 川和雄、東野良、森山安次、山崎幸二、山田
 昇ヒマラヤ資料館、匿名2名、
[2口] 大内論文、田辺治、佐藤英樹、菅原和明、
 桑川章、長繁夫、今村裕隆、国沢鎮雄、青木
 正樹、小松伸、田村正勝、寺田捨巳、戸部秀
 男、能勢真人、平田清志、松木克雄、宮崎久
 夫、谷田川武、山田豊、渡辺一夫、渡辺斉、
 匿名1名、
[1口] 古関正雄、林雅樹、名越實、丸山芳雄、
 鈴木正典、青木茂、中村正勝、下田泰義、浅
 野勝己、伊東満、生玉道雄、岩淵富士男、上
 杉純夫、植木知司、植竹清孝、内田嘉弘、梅
 山義弘、江尻健二、遠藤清夫、及川美奈子、
 小野寺斉、大澤清、大宮求、岡田伊佐男、岡
 田和泰、沖允人、桶川和気夫、加藤智司、香
 取純、亀井正、喜内敏夫、国重光熙、倉澤保
 男、小林正己、小室豊、佐藤邦彦、斎藤繁、
 斎藤則子、斎藤孝孝、笹原芳樹、沢田幸子、
 澤村幸蔵、鹿田雄三、渋沢真一、清水修、清
 水正雄、志村真由美、鈴木昭、関根孝次、関
 根孝、善行久親、田邊卓司、田淵一、高田幸
 子、高橋敏雄、千葉良正、辻野健治、飛田和
 夫、名村義人、中島俊弥、中谷正秀、中村保、
 西郡光昭、西本武志、貫田宗男、沼田敏彦、
 橋本昌典、日向野恵美子、日南長二郎、藤田
 弘基、古川英勝、堀内弘和、牧久真子、増山
 茂、三浦敏弘、南勲、宮崎勉、森秀子、森谷
 信次、守屋益男、柳健一、柳穰、山岸和男、
 山中芳樹、山本篤、吉田和宏、吉田秀樹、若
 尾巻廣、渡邊雄二、匿名1名、

合計146人と1団体 3,230,000円

■ 寸 感 ■

山岳界の要人の訃報が相次いだ。10月14日には、中国登山協会の前主席の曾曙生さんが急逝された。曾さんは、1977年に当時はソ連との国境であったトムール（ソ連名はボベダ 7,439m）の登頂者ではあるが、登山家というよりは、調査畑が長く、苦労人で人当たりのよい方であった。

11月16日には、日本山岳協会の元副会長の澤村幸蔵さんも逝去された。77歳であった。ベルニナ山岳会の創立者であり、神奈川県山岳連盟会長を務め、日本山岳協会の設立発起人、文部省登山研修所が創設されると専門調査委員などを務めた。澤村さんも苦労人で人当たりのよい方であった。

ご兩人のご冥福をお祈りします。（山森）

事務局日誌（11月）

- 1日（金） 山岳文化学会準備会（酒井、山森）
7日（木） 国際山岳年日本委員会（カナダ大使館ビル）山森
会費未納督促状発送（67通）

- 8日（金） ヒマラヤ373号発送
12日（火） インド、ヒマラヤ会議会場申し込み
13日（水） 35周年記念トレッキング隊写真交換会（於、ルーム）
15日（金） 中国登山隊調査用紙発送（13通）
CMAへ「トンシャンジャブー」登山についてFAX
19日（火） 日山協元副会長、沢村幸蔵氏葬儀、（於、厚木葬会館、山森）
25日（月） 東京集会（19名）

ヒマラヤ No.374（1月号）

平成14年12月10日印刷 15年1月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

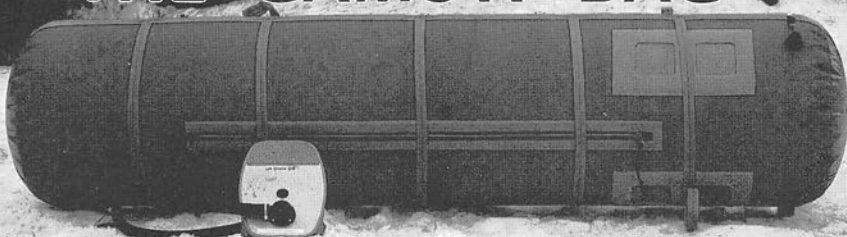
東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13
TEL: (03) 3740-2674(直)
http://www.tokyo-np.co.jp/

山書散策 登山の運動生理学百科 今まで数多く発行された山書、何を读んだらいいか、そんな時の指針として——「登山」連載時から好評。 河村正之 著 1500円	登山の運動生理学百科 「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむよう、中高年登山の虎の巻。 山本正嘉 著 2000円	中高年登山なんでも百科 「登山」に年輪はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむよう、中高年登山の虎の巻。 福島正明 著 1500円	新・山靴の音 選歴をむかえた著者が山への思いと、山の間との交遊を綴る。 芳野満彦 著 1262円	改訂増補六十歳からの日本三百名山 60歳から13年間で三百座を踏破したスーパードンさんの山行記。 田中三郎 著 1456円	花と歴史の50山 「花と歴史の山旅」の第2弾、花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。 田中澄江 著 1359円	北アルプス山小屋物語 歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。 柳原修一 著 1456円	北アルプスやまびと物語 「岳人」に3年余り連載した「山人探訪」男達の賦」に加筆、登山をより楽しむための一冊。 柳原修一 著 1456円	すぐ役立つ記念日の山に登ろう 人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はここに。 石井光造 著 1300円	すぐ役立つ山の気象と救急法 山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。 飯田睦治郎 著 1359円	すぐ役立つ山の花学 「飛騨高山の花博」上として知られる著者の、山の花見術入門書。 小野木三郎 著 1456円	山小屋の主人の炉端語 著名な山小屋の主人たちが宿の登山者に炉端で語る「一話の取っ置きのお話」。 工藤隆雄 著 1500円	最新クライミング技術 ジム・クレチのフリークライミングがマルチ・ミチ、アル・バイン・ビックマン、オールド・マウス・マール、必読の書。この技術を手に入れたら、クライミングはもうその意味や運動が違ってきます。詳しく解説、実践的なクライミングのポイント、心構えなども細かくアドバイス。 菊地敏之 著 1600円
---	--	---	---	--	--	---	--	---	---	---	---	---

※本体価格に消費税が加算されます。

THE GAMOW BAG



高山病対策の必需品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

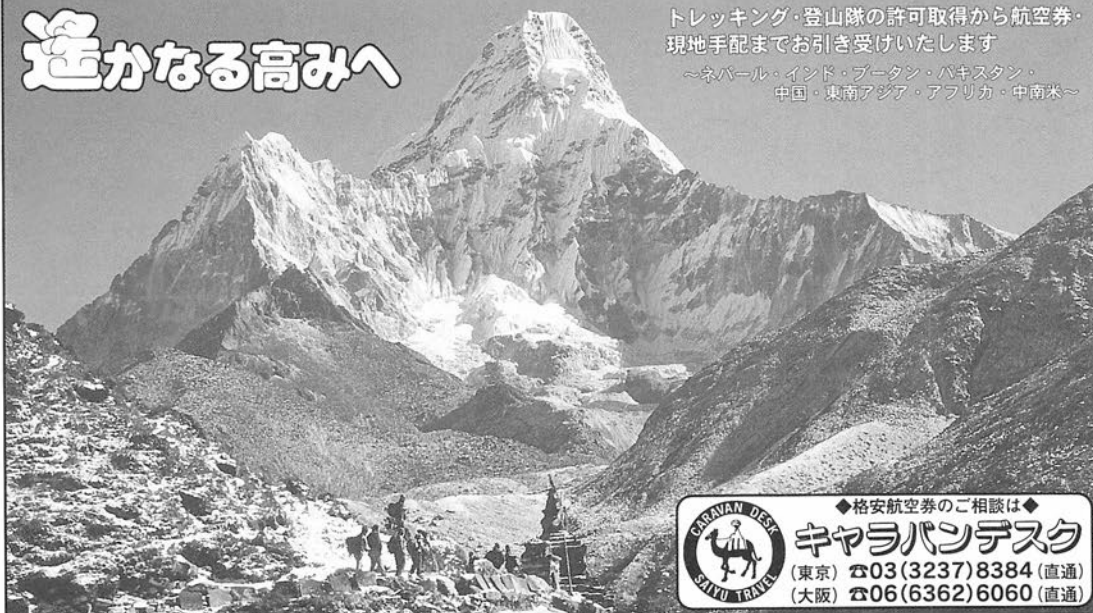
TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャラバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1

岩波書店アネックス5F

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

■大阪営業所/〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966



株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

●登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
●新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
●神田登山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-327-0622
●神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
●八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
●大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
●高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
●川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
●甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店/〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
●長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

●新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
●秋田小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
●盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
●北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
●伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
●平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
●外高部(メールオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004